

社会的事象の相互の関連を考察する力を育成する 小学校社会科の指導と評価の工夫

— 様々な情報を関連付けて、社会的事象の意味を考える評価問題の開発を起点として —

熊野町立熊野第四小学校 井上 努

研究の要約

本研究は、リサーチクエスチョンを「①小学校社会科において、児童に社会的事象の相互の関連を考察する力を育成するための学習指導はどのように在るべきか。②また、その力を見取る学習評価はどのように在るべきか」と設定し、これを明らかにすることを目的として行ったものである。先行研究等の分析や調査研究を通して、本研究で児童に育成する力や単元構成について検討した。これを基に仮説を「小学校社会科において、様々な情報を関連付けて、社会的事象の意味を考える評価問題の開発を起点として、学習指導と評価の工夫を行えば、児童の社会的事象の相互の関連を考察する力を育成できるであろう」とした。そこで、本仮説に基づき、指導と評価を一体化させるために評価問題や「問いの構造図」、「知識の構造図」を作成し、検証授業を行った。その結果、児童に社会的事象の相互の関連を考察する力を育成することに、一定の有効性を確認できた。

I 主題設定の理由

「中央教育審議会答申」（平成 28 年）では、小学校学習指導要領（平成 20 年告示）の課題の一つとして、「資料から読み取った情報を基にして社会的事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり多角的に考察したりして表現する力の育成が不十分である」¹⁾点が指摘されており、児童の思考力、判断力、表現力等を育成する指導が求められている。これを受けて、小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説社会編（平成 30 年、以下「29 年解説」とする。）では、社会科の目標で「(2)社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりする力、考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う。」²⁾と示されている。

所属校においても、ペーパーテスト調査等の結果により、思考力、判断力、表現力等に課題が見られることが一定程度確認できた。2019 年度の標準学力調査の結果を次の表 1 に示す。評価の観点が思考・判断・表現の問題が、各学年 26～30 問中 7～10 題出題されていた。評価の主たる観点が「社会的な思考・判断・表現」である問題について各学年二段で示し、上段に全国平均に対して最も正答率が高かった問題に

表 1 2019 年度標準学力調査 結果の一部

学年	出題のねらい	目標値	所属校 正答率	全国 正答率	全国との 比較
3 年	市の交通の様子について、資料を読み取り考え、表現することができる。	45.0	57.7	38.9	+18.8
	スーパーマーケットの地域貢献について、考えることができる。	65.0	57.7	69.6	-11.9
4 年	ごみの出し方や集積所などのきまりについて、資料をもとに考えることができる。	65.0	88.9	80.6	+ 8.3
	廃棄物の処理の仕方の工夫について、資料をもとに考え表現することができる。	30.0	14.8	25.7	-10.9
5 年	耕地整理が農作業にもたらすよい点について、複数の資料をもとに考え、表現することができる。	60.0	75.8	62.7	+13.1
	海外生産について資料をもとに考えることができる。	45.0	35.5	45.0	- 9.5
6 年	不平等条約の改正について、複数の資料をもとに考え、表現することができる。	65.0	70.7	65.9	+ 4.8
	不平等条約の改正について、資料をもとに考えることができる。	65.0	52.4	73.8	-21.4

ついて、下段に逆に最も正答率が低かった問題について示している。その中でも、児童の多くに課題が見られたのが「社会的事象の相互の関連を考察する力」であり、この力に焦点化し、課題の克服を目指していきたい。ついては、この課題の克服を目指す指導の在り方について、評価方法の検討を起点に研究する。

令和2年度より小学校学習指導要領が全面実施となり、総則には「創意工夫の中で学習評価の妥当性や信頼性が高められるよう、組織的かつ計画的な取組を推進する」³⁾とある。しかしながら、何をどのように評価すればよいのか、不安を抱えている同僚も多い。特に本研究で育成を目指す力を含む「思考力、判断力、表現力等」は、目に見えにくい力であり、単元末の業者テストで児童の学習過程を正しく評価できているのか、また自らの指導の在り方を振り返ることができているのかなどの課題がある。

平成24・25年度小学校学習指導要領実施状況調査で実施された、思考力、判断力、表現力等の育成に関する評価問題群のうち、様々な情報を関連付けて、社会的事象の意味を考える問題群に類似した問題の正答率が、所属校では低い傾向にある実態を踏まえ、本研究ではこの問題群の特色に注目し、評価問題の構造を分析する。

このように、「思考力、判断力、表現力等」の学習評価や「指導と評価の一体化」に関する具体的方策を提案することが学校現場で必要とされており、そこに応えたいとの思いから、本主題を設定した。

Ⅱ 研究の概要

1 本研究のリサーチクエスチョン

本研究のリサーチクエスチョンを「①小学校社会科において、児童に社会的事象の相互の関連を考察する力を育成するための学習指導はどのように在るべきか。②また、その力を見取る学習評価はどのように在るべきか」と設定する。

2 研究の仮説

本研究の仮説を「小学校社会科において、様々な情報を関連付けて、社会的事象の意味を考える評価問題の開発を起点として、学習指導と評価の工夫を行えば、児童の社会的事象の相互の関連を考察する力を育成できるであろう」と設定する。

3 研究対象

- (1) 平成24・25年度小学校学習指導要領実施状況調査や業者テスト等の評価問題
- (2) 所属校での検証授業の実践前後の評価問題への結果及び質問紙調査の結果
- (3) 所属校や県内の小学校の教師を対象とした質問紙調査の結果

4 研究の方法・手順

研究の方法と手順を以下に示す。

- (1) 平成24・25年度小学校学習指導要領実施状況調査や業者テスト等の評価問題を分析する。
- (2) 先行研究を整理し、社会的事象の相互の関連を考察する力を育成するための単元構成の論理や、学習評価の在り方について検討する。
- (3) 所属校や県内の小学校の教師を対象とした質問紙調査を実施し、「指導と評価の一体化」に関する教師の意識について実態を把握する。
- (4) 社会的事象の相互の関連を考察する力を育成するための単元開発、評価問題の開発及び学習指導案の作成を開始する。
- (5) 所属校での検証授業を通して、検証授業前後の児童の変容を分析し、成果と課題を整理する。評価問題は、プレテスト、ミドルテスト、ポストテストと3回行い、児童の変容を分析し、検証授業や評価問題の効果を検証する。

5 検証の視点と方法

検証の視点と方法を次の表2に示す。

表2 検証の視点と方法

	検証の視点	検証の方法
1	評価問題の作成を起点とした学習指導は、児童の社会的事象の相互の関連を考察する力の育成に有効であったか。	プレテスト ミドルテスト ポストテスト フィードバック問題
2	「学びのプラン」を活用した学習指導は、学習及び学習評価の計画を教師と児童が共有し、児童が学習の見通しをもつのに有効であったか。	質問紙調査

Ⅲ 研究の基本的な考え方

1 社会的事象の相互の関連を考察する力について (1) 学習指導要領上の位置付け

本研究で児童に育成を目指す「社会的事象の相互の関連を考察する力」と学習指導要領上の位置付けを整理し述べる。

「29年解説」によると、「『思考力、判断力、表現力等』は、問題解決的な学習過程において相互に関連性をもちながら育成されるものと考えられる。」⁴⁾とある。本研究では「思考力、判断力、表現力等」を一体のものとして考えることとするが、児童に育成したい能力を焦点化するために「思考力、判断力、表現力等」を細分化してみていくこととする。

「29年解説」では、「思考力、判断力、表現力等」のうち「思考力、判断力」は、「社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考える力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて、学習したことを基に、社会への関わり方を選択・判断する

力」⁵⁾とある。その中で、「社会的事象の相互の関連」とは、「比較したり関連付けたりして捉えることのできる事象と事象のつながりや関わりなど」⁶⁾とされている。上記を基に、本研究で児童に育成を目指す「社会的事象の相互の関連を考察する力」を、社会科で育成する思考力、判断力、表現力等の一つであり、「比較したり関連付けたりして捉えることのできる事象と事象のつながりや関わりなどを考察する力」とする。

(2) 平成 24・25 年度小学校学習指導要領実施状況調査の問題群との関連

前述した平成 24・25 年度小学校学習指導要領実施状況調査では、「思考力、判断力、表現力等」を六つの評価問題群に分類している。次の表 3 に示す。

表 3 平成 24・25 年度小学校学習指導要領実施状況調査
思考力、判断力、表現力等を問う評価問題群

評価問題群	内容
(ア)	学習問題を見だし、その解決の見通しを持つ問題
(イ)	様々な情報を比較して、社会的事象の意味を考える問題
(ウ)	様々な情報を関連付けて、社会的事象の意味を考える問題
(エ)	様々な情報を総合して、社会的事象の意味を考える問題
(オ)	社会の一員として、社会的事象の意味を考える問題
(カ)	知識や技能を活用して、社会的事象について説明する問題

本研究では、これらの評価問題群のうち、所属校の児童が、事前の調査結果から通過率の低かった評価問題と類似した評価問題群である(ウ)様々な情報を関連付けて、社会的事象の意味を考える問題群に注目し分析することとする。

(3) 社会的事象の相互の関連を考察する力を育成する単元構成の論理

ア 「説明」の方法に基づく社会科の単元構成

原田智仁ら(2020)は、主な社会科の授業づくりの方法原理として「問題解決」「理解」「説明」「議論」の四類型を示している⁽¹⁾。社会的事象の相互の関連を考察する力を育成することを目指す本研究では、この四類型のうち、児童が学習過程で複数の社会的事象の関連を考察する場面を組織している「説明」の方法に基づく社会科に注目する。

二井正浩(2020)は、「説明」の方法に基づく社会科の授業づくりについて、「事実についての『なぜかあるか』の根拠』としての説明が分かる授業、さらにその説明を基に新しい事実についても分かる(説明できる)ようになる授業」⁷⁾であると述べている。

森分孝治(1997)は、「説明」すなわち「社会的事象の科学的説明」を認識の原理とする授業構成のあり方について主張している。その中で、思考力を「社会的事象を、客観的に、より広く深く、より間

違い少なく捉える力」⁸⁾と定義している。また、思考力育成において、内容(知識・理解)と形式(思考技能)は一体となったものであり、両者を切り離して捉えられないことを指摘している。そして、「①特定の事象の理解・説明を目指す事実的思考」と、「②特定の事象を手段として一般的理論を発見し、それをを用いて他の事象をも理解し説明していく理論的思考」とに分けている。その上で、思考力を「事実的思考・理論的思考を、より広く、より深く、より正確に、すなわち多面的に、より体系的に、より事実に一致するしかたで行っていく力」⁹⁾と述べている。

森分はまた、知識の成長についても言及し、知識の変革的成長と累積的成長に分類している。変革的成長とは、知識の成長は、常に既存の知識の修正・発展というかたちをとり、その時点であらゆる批判的吟味に耐えたものを新しい理論として採用していくという過程をとるとしている。累積的成長とは、パラダイム(学問の基礎的理論)のもとで、知識を拡大し精密化し、その応用範囲を拡大していくとともに、事実と理論との一致の精度を高めることに努めるとしている⁽²⁾。

原田(2020)は、次の図 1 に示すように、思考を経て獲得した知識は通常、事実的知識(いつか、どこか、誰か、何か、どうしたかの問いに答える知識)、概念的説明的知識(なぜという問いに答える知識)、価値判断を意味する知識(どうすべきかの問いに答える知識)の三層構造で捉えることができると述べている⁽³⁾。

これらを基に、本研究では社会科固有の思考力として、森分の唱える概念的思考の育成や原田の唱える概念的説明的知識を児童が獲得できるようにするための授業づくりを目指す。そして、児童が、個別の社会的事象の知識の習得に終始する授業から脱却し、複数の社会的事象の相互の関連を説明できるようにする授業へと変革させたい。

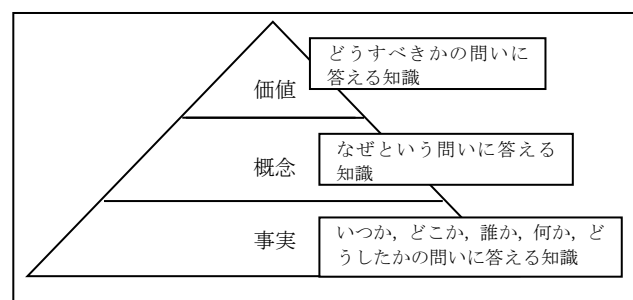


図 1 知識の構造
(原田(2020)の知識の構造を参考に稿者作成)

イ 複数の社会的事象への出合わせ方と問いの設定

具体的に、児童が、社会的事象の相互の関連を考察できるようにするためには、複数の社会的事象をどのように単元構成に組織すればよいか。

本研究では、単元構成の論理として、先述の森分の知識の変革的成長の論理（探求の論理）に依拠する。

これを基に、次の図2に示すように、単元の学習を通して児童がもつ既存の理論を P_1 や P_2 などの新たな問題として、社会的事象を児童に出合わせることで、児童がこれまで知っていることや思い込んでいることでは説明できない事態をつくる工夫を行う。この学習過程を通じ、一つの社会的事象に関する個別の知識のみの習得から、複数の社会的事象の相互の関係を考察する力を児童に育成できると考える。

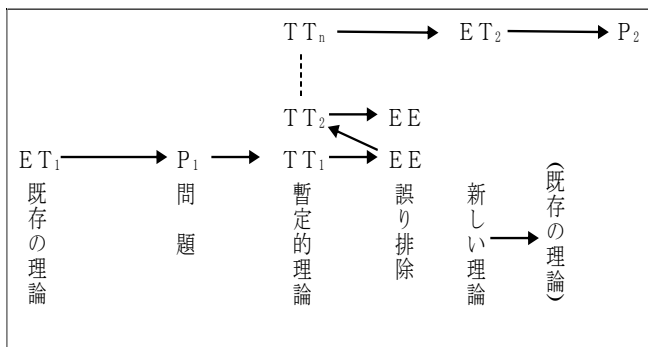


図2 知識の変革的成長の論理

（森分(1984)の知識の変革的成長の論理を参考に稿者作成）

また、この単元構成で授業を行う際に、留意したいことは、児童と教師が共に追究する問いの種類である。本研究では、大きく三種類の問いと知識に分類し、次のように設定する。一つは、児童が個別の知識を習得するための問い。二つは、児童が事象間の関連を考察するための問い。三つは、児童が自己と実社会との関連を考え、価値判断するための問いである⁽⁴⁾。

2 小学校社会科の指導と評価の現状と課題

(1) 理論と実践を一体化する評価について

小学校社会科の評価方法の問題点について、文献研究から次のようなことが分かった。峯明秀(2014)は、「社会科における評価研究は、社会科で目指す学力形成や学力の実態調査研究、評価方法・手段や評価活動の仕方の提言、テスト問題の工夫などさまざまな領域やレベルでなされてきている。しかし、社会科固有の評価は何をどのようにすることなのか、実際

の評価活動はどのようにするのか、理論と実践を一体化する評価方法論はいまだ確立していない⁽¹⁰⁾と述べている。本研究では、理論に基づいた学習指導により児童に力を育成できたか、教師自身が自らの実践を省察し、次の指導や支援に生かすためのPDCAサイクルがどのようなものであったかの二点について検討する。

(2) 小学校社会科における指導と評価の現状

小学校では社会科を含む各教科の学習評価を行う際、「思考力、判断力、表現力等」の判断材料として業者テストの割合が高いという現状がある。授業者が評価問題を作成せずに業者テストのみで学習評価を行うことは、児童の学習改善や教師の指導改善につながりにくいのではないかと考える。しかしながら、全教科の評価問題を一人の教師が作成することは、小学校の場合、現実的ではないと考える。そこで、国立教育政策研究所が示す参考資料や先行研究を参照し、実際の社会科の授業の中で活用できるような評価問題の特質を明らかにし、その具体を提案することによって、業者テストに頼る傾向がある従来の学習評価の在り方を見直すことができるようにしたい。

(3) 単元の指導及び評価の計画について

ア 児童と教師による「学びのプラン」の共有

評価問題を開発した後、どのように指導及び評価を進めていくのかについて、『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料⁽⁵⁾に示されている、「本編事例における学習評価の進め方について」を基に検討する⁽⁵⁾。

本研究では、この「本編事例における学習評価の進め方について」を基にした一連の学習及び学習評価の計画を児童と教師が共有することで、学習効果を高めたいと考える。

高木展郎(2019)は、これまでは、評価規準や評価方法等の内容を教師が子供たちに授業前に示すことは、あまり行われていないことを指摘している。その上で、「育成すべき資質・能力の育成過程を示している計画（いわゆる単元計画）の内容を子どもたちの立場から表現した学習計画である『学びのプラン』⁽¹¹⁾なるものを授業の前に子供たちに示すことが大切であると主張している。次頁図3に具体を示す。これらの考え方を基に、指導と評価の在り方を一例として示していきたい。

イ 評価問題と単元構成における問いの関係

本研究では、「学びのプラン」を児童に提示することで、評価規準や評価方法について児童と共通理解を図る。単元構成における問いのうち、「児童が事象

学びのプラン			
1. 単元・題材名 2. 身に付けたい資質・能力 単元・題材で育成する＜評価規準＞を、児童にわかりやすく、児童を主語にして、具体的に示す。			
3. この単元で学習すること			
月日		身に付けたい資質・能力	学習の内容
	第一次	1・2	- この単元・題材の学習の過程の中で、児童が「身に付けたい資質・能力」として設定した3観点の評価規準を、児童に「身に付けたい資質・能力」として、評価方法と共に具体的に示す。 - この単元で児童に「身に付けたい資質・能力」を、授業の流れの中で、いつどのように身に付けるか、学習での流れがわかるように示す。 「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、その単元での学習を通して育成すべき資質・能力であるので、単元での学習の最終段階で行うことが多い。 - 評価は、1時間のみで行うだけでなく、数時間にまたがる評価もあり得る。 - 評価内容は、複数回繰り返す場合もある。
	第二次	3・4・5・6	- 学習の「見通し」は単元のはじめに児童に必ず確認する。 「学習の内容」は、時間ごとに児童が行う活動の具体として示す。 - 時間ごとの主たる学習活動を児童の立場から、わかりやすく示す。 - 学習のまとまりを整理して、単元・題材全体の学習がどのように進むかを、児童にわかるように示す。 - 言語活動には、記録・要約・説明・論述・話し合いの活動を入れる。 「振り返り」は、「見通し」に対して行うものであり、「見通し」と対応していることを児童に確認する。
	第三次	7・8	
	第四次	9・10	

*「学びのプラン」によって、児童に学習の「見通し」をもたせる。
 「学びのプラン」は、学習指導案をもとに、時間ごとの学習目標・学習内容・評価内容を児童の立場から具体的に示すことにより、児童に単元全体で、「何ができるようになるか」、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」、「何が身に付いたか」を、具体的にわかるように示すためのものである。

図3 学びのプラン¹²⁾

間の関連を考察するための問い」と「児童が自己と実社会との関連を考え、価値判断するための問い」を評価問題に反映させる。そして、その評価時期を「学びのプラン」に示していく。そのことにより、プレテスト、ミドルテスト、ポストテストも含めた学習の見通しを児童にもたせ、評価を含めた学習計画を教師と共有していく。

単元で児童に身に付けさせたい知識及びそのための問いを明確にするため、社会科教育の先行研究を基に「問いの構造図」と「知識の構造図」を作成する。本研究では、業者テストも含め、どのような評価方法で見取るのかを、これらの構造図に明らかにする。具体的には、授業の前に第1回目の評価問題を実施し、単元の学習内容のレディネスを確認する。ここでの評価問題は、「児童が事象間の関連を考察するための問い」及び「児童が自己と実社会との関連を考え、価値判断するための問い」と整合させる。授業の最初に「学びのプラン」を提示し、「学習の見通し」をもたせてから、学習に入る。その後、単元の学習を進めて

いき、単元の中ほどで第2回目の評価問題を実施する。場合によっては、指導の計画を修正したり、個別の指導を行ったりしながら授業を進める。ここでの評価問題は、「児童が事象間の関連を考察するための問い」と整合させる。単元の最後に、第3回目の評価問題を実施する。ここで実施する評価問題は、単元で学習した事例とは別の事例を取り上げ、問いを設定し、「児童が事象間の関連を考察するための問い」と整合させる。また、「児童が自己と実社会との関連を考え、価値判断するための問い」とも整合させる。このことにより、児童の変容を見取ることができると考える。もしも、「児童が個別の知識を習得する問い」が業者テストにすべて示されていない場合には、ミドルテスト、ポストテストで評価していく。評価問題は、平成2年度小学校学習指導要領実施状況調査等も参考とする。

このように、評価問題と問いとが整あるものとなるような工夫を行うことで、指導と評価の充実及び一体化を図りたい。

ウ 教師の指導改善につなげる工夫

学習評価の改善が、教師の指導改善にもつながるようにするために、本論では、実際の検証授業の具体を計画(Plan)・実践(Do)・評価(Check)・改善(Action)の一連のサイクルを実践後に分析する際に、峯(2011)の「知識の構造化・推論過程の組織によるPDCAサイクル」を活用する。詳細を、別添資料1に示す。峯は、「知識の構造化・推論過程の組織によるPDCAサイクル」の各段階を「授業観」「授業の組織」「授業の具体」とでマトリックス化し、授業者が自らの授業づくりを振り返ることができるようにしている⁶⁾。

これを活用し、指導と評価の一体化を目指す授業づくりを行う際に、各段階でどのようなことが行われたのかを分析していく。

IV 研究の実際－分析と考察－

1 評価問題の分析と考察

(1) 業者テストの分析と考察

業者テストの実態を把握するため、次頁表4、表5に示す二つの視点で業者テストの問題の分類を試みた。分類した各問題群の全体の得点に対する割合を、百分率で示している。一つは、表4に示すように解答方法による分類である。二つは、表5に示すように原田(2020)の唱える、児童が獲得する知識による分類である。分析対象は、児童が第5学年で学習する単元

「世界の中の国土」の4社の業者テストとした。分析の結果、大きく二つのことが分かった。

一つは、表4より、業者により差はあるが、選択問題の割合が高いことや、どの業者も短文記述の問題を設定しているが、長文記述の問題はないことである。二つは、表5より、概念的説明的知識の割合が高く、価値判断を意味する知識を問う出題がなかったことである。

これらのことから、既存の業者テストで測ることのできる学力には偏りがあることがあり、業者テストだけでは可視化できないものがあることが、一定程度分かった。

表4 業者テスト 解答方法による分類 (%)

	A社	B社	C社	D社	平均
記号問題・選択	20	60	50	60	47.5
語句・選択	50	—	30	—	20.0
正誤判断→記述	—	30	—	20	12.5
語句記述	10	—	10	—	5.0
短文記述	20	10	10	20	15.0
長文記述	—	—	—	—	0

表5 獲得する知識による分類 (%)

	A社	B社	C社	D社	平均
事実に知識	10	30	80	40	40.0
概念的 説明的知識	90	70	20	60	60.0
価値判断を 意味する知識	—	—	—	—	0

2 質問紙調査に基づく分析と考察

(1) 質問紙調査の概要

ア 質問紙調査の目的

質問紙調査では、学習評価に関する所属校の教師及び広島県立教育センターの教員長期研修生（小学校籍）の意識について明らかにする。そして、分析結果から、「指導と評価の一体化」に関する具体的方策を提案することを目的とする。また、所属校の第5学年の児童に対しても、学習評価に関する意識について明らかにするために、質問紙調査を行った。

イ 質問紙調査の方法

所属校の教師及び教員長期研修生、所属校の第5学年の児童を対象とする。質問紙は、所属校の教師と教員長期研修生に対しては直接回答依頼を行った。所属校の第5学年の児童には、学級担任を通して回答依頼を行った。質問紙調査結果に複数の教員への聞き取り調査から得た情報も加えて考察し、指導と評価の一体化を図るための参考とする。

ウ 質問紙調査の主な内容

教師用の質問紙調査は、平成29年度文部科学省委託調査「学習指導と学習評価に対する意識調査報告書」（平成30年1月株式会社浜銀総合研究所）を参考に作成した。

(2) 質問紙調査結果

ア 質問紙の回収状況

教師用は、所属校の教師21人、教員長期研修生5人の計26人から回答を得た。児童用は、所属校の第5学年の児童56人から回答を得た。次頁表6、表7の集計は、これらの回答を基に行ったものである。

イ 集計と分析・考察（教師用）

注目する項目の分析結果と考察を以下に述べる。

まず、学習評価全般について述べる。次頁表6の設問1より、多くの教師（88.5%）が、自分の評価方法について、一定程度の不安を感じていることが分かった。設問2より、学習評価において業者テストの影響が大きいことが分かった（知識・技能96.2%、思考・判断・表現84.6%）。設問3より、学習評価を授業改善等につなげることができているという意識が、全国平均（89.4%）に比べて低いことが分かった（73.1%）。

次に、社会科の思考・判断・表現の学習評価については、設問7より業者テストの影響が大きいことが分かった（80.8%）。その一方で、レポート、振り返りシート、授業中の児童の発言の内容など、多様な方法で評価がなされていることも分かった。

これまでの結果から、学習評価を授業改善等につなげることができているという教師の意識が低いという現状から、「指導と評価の一体化」に関する具体的方策を提案する必要性を確認することができた。また、学習評価への業者テストの影響が大きい状況下で、業者テストで測ることができない学力を評価し、教師の指導に生かす方策の必要性を確認することができた。

ウ 集計と分析・考察（児童用）

注目する項目の分析結果と考察を以下に述べる。次頁表7の設問2より、ほとんどの評価方法が80%を超えていることから、教師による様々な評価が児童に有効に働いていることが、一定程度確認できた。設問3より、学習したことを他の学習や普段の生活に生かそうとする意識の高さや、授業で資料に対して意欲的に学習に取り組んでいる様子について、一定程度確認できた。一方、既習事項を生かして学習しているという意識が低い傾向にあることが分かった（67.8%）。児童の学習への高い意欲を大事にしながら、既習の社会的事実と新たな社会的事実を関連付ける学習をしていく必要があることを感じた。

表 6 教師用質問紙調査の結果（％）

【学習評価全般について】 *（ ）は全国調査の数値		
質問項目	あるまたは 少しある	ないまたは あまりない
1. 児童の学習評価について、自分の評価方法は今のままでよいのか、不安に感じることがあります。	88.5	11.5
質問項目	影響している またはやや影響 している	影響していない またはあまり 影響していない
2. 学習評価において、以下の観点で業者テストが観点別評価を行う際の影響を及ぼす割合はどの程度ですか。		
①知識・技能	96.2 (96.9)	3.8 (3.1)
②思考・判断・表現	84.6 (95.2)	15.4 (4.7)
③主体的に学習に取り組む態度	42.3 (58.8)	57.7 (41.1)
質問項目	そう思うまたは まあそう思う	そう思わない またはあまり そう思わない
3. 観点別学習状況の評価を、授業改善や個に応じた指導の充実につなげられていると感じますか。	73.1 (89.4)	26.9 (10.7)
【社会科の思考・判断・表現の学習評価について】		
質問項目	影響している またはやや 影響している	影響していない またはあまり 影響していない
7. 児童の思考・判断・表現をどのような方法で評価していますか。それぞれの方法が観点別評価に影響を及ぼす割合につき、あてはまるものを選んでください。		
①単元の区切りなどで実施する、業者作成のテスト	80.8	3.8 *未記入 15.4
②単元の区切りなどで実施する、教師自作のテスト	38.5	42.3 *未記入 19.2
③パフォーマンス課題	42.3	38.5 *未記入 19.2
④児童が調べたことや考えたことについて、4記述したレポートや作文、発表	76.9	3.8 *未記入 19.2
⑤授業における教員の発問に対する児童の反応の観察（発言以外）	57.7	26.9 *未記入 15.4
⑥児童が記述したノート（学期を通して、継続して書いたもの）	76.9	7.7 *未記入 15.4
⑦児童が記述した振り返りシートや児童に対するアンケート	65.4	19.2 *未記入 15.4
⑧授業中の児童の挙手や発言の回数	30.8	53.8 *未記入 15.4
⑨授業中の児童の発言の内容（つぶやきや、班活動等での発言も含む）	65.4	19.2 *未記入 15.4
⑩課された宿題を児童が提出しているかどうか	34.6	50 *未記入 15.4
⑪提出された宿題の質	57.7	26.9 *未記入 15.4
⑫授業で用いる教科書・教材等の忘れ物の頻度	15.4	69.2 *未記入 15.4
⑬ワークシートや集めた資料などを長期に蓄積した学習ファイル（ポートフォリオ）	57.7	26.9 *未記入 15.4
⑭教員自らの経験や見識に基づく総合的な判断	53.8	30.8 *未記入 15.4
⑮その他の方法	0	84.6 *未記入 15.4

表 7 児童用質問紙調査の結果（％）

質問項目	思うまたは まあまあ思う	思わないまたは あまり思わない
2. 社会科の授業で、自分を成長させることができたと思うものについて、次の①～⑨のそれぞれに答えてください。		
①カラーテスト（業者テスト）の結果	98.2	1.8
②先生が作ったテストや問題の結果	92.9	7.1
③新聞など、学習したことや考えたことをまとめた作品への先生のコメント	85.7	14.3
④授業での発表に対する先生のコメント	89.3	10.7
⑤自分がまとめたノートへの先生のコメント	89.3	10.7
⑥毎時間の振り返り	78.6	21.4
⑦出された宿題への先生のコメント	94.6	3.6 *未記入 1.8
⑧授業中の学級や班の友達からの声かけ	87.5	10.7 *未記入 1.8
⑨授業中の先生からの声かけ	94.6	5.4
質問項目	しているまたは まあまあしてい る	していないまたは あまりしていない
3. 自分の考えに一番近いものを、○で囲みましょう。		
①社会科の授業中に、「今まで習ったことが使えないかな。」と考えながら学習していますか。	67.8	30.4 *未記入 1.8
②社会科の授業で学習したことを、ほかの学習やふだんの生活に生かそうと考えていますか。	85.7	12.5 *未記入 1.8
③社会科の授業中に、資料（グラフや表など）をもとに、「なぜだろう。」と考えながら学習していますか。	80.4	17.9 *未記入 1.8
④社会科の授業で二つの資料（グラフや表など）が示されたとき、「どのような関係があるのかな。」と考えながら学習していますか。	85.7	12.5 *未記入 1.8
⑤社会科の授業で二つの資料（グラフや表など）が示されたとき、二つを見比べながら学習しますか。	83.9	12.5 *未記入 3.6

- ・貿易や運輸が工業生産に果たしている役割を考え、説明している。
- ・貿易や運輸について、主体的に問題解決しようとしたり、学習したことを社会生活に生かそうとしたりしている。

○ 指導計画

時	学習内容
1	運輸と貿易の“ひみつ”に関する学習問題をつくる。「学びのプラン」で、単元の学習の見通しをもつ。〔プレテスト〕
2	交通網の広がり等に注目して、運輸の“ひみつ”について地図帳や各種の資料で調べ、説明する。「学びのプラン」で、授業の見通しの確認及び振り返りを行う。
3	日本の輸出の特色について、地図帳や各種の資料で調べ、説明する。「学びのプラン」で、授業の見通しの確認及び振り返りを行う。
4	日本の輸入の特色について調べ、輸出と関連付けて加工貿易について説明する。「学びのプラン」で、授業の見通しの確認及び振り返りを行う。〔ミドルテスト〕
5	貿易の“ひみつ”について考えたことを文章にまとめ、説明する。「学びのプラン」で、授業の見通しの確認及び単元の学習の振り返りを行う。〔ポストテスト、事後アンケート〕

2 授業の内容と本研究の関わり

(1) 本単元の社会的事象の相互の関連を考察する力について

所属校の市町が採択している教科書である東京書籍『新しい社会科5下』では、本単元を運輸、貿易の順に取り上げ、それぞれの仕組を理解させながら、工業生産における運輸や貿易の役割を考えさせる構成になっている。

本単元では、児童が社会的事象の相互の関連を考

V 検証授業の内容

1 授業の概要

- 期 間 令和2年11月6日～11月18日
- 対 象 所属校第5学年（2学級56人）
- 単元名 工業生産を支える輸送と貿易
～貿易の“ひみつ”を解き明かそう！～
- 目 標
 - ・貿易や運輸は、工業生産を支える重要な役割を果たしていることを理解している。

察する場面を、大きく三つ設ける。一つは、運輸と貿易を関連付けて、工業生産におけるそれらの役割を考察する場面である。二つは、日本の輸出と輸入を関連付けて、加工貿易の仕組みについて説明させる場面である。

三つは、貿易に関する既習の概念と新たな社会的現象を関連付けて、自由貿易についての大まかな概念を獲得させる場面である。言うなれば、児童が獲得した概念を変革的に成長させる場面である。本単元において獲得させる概念的・説明的知識を、「国際分業は、世界全体により多くの富をもたらす。各国は、その国が比較優位をもつ財を輸出し、比較劣位をもつ財を輸入している。」と設定する。言い換えれば、自由貿易の概念についての理解である。ここに児童がたどり着くまでには、二段階のステップを踏む必要があると考える。

第一段階で、既習事項を活用しながら日本の「輸出」と「輸入」を関連付けて考察することで、「貿易とは自国に不足しているものを輸入し、余っているものを輸出するものである。」という概念を児童が獲得する。しかし、現代の貿易では工業製品が圧倒的なシェアを占めており、日本も例外ではない。国内で機械類を生産する技術があるにも関わらず、その多くを輸入している。このことは、それまでの児童のもつ概念では説明がつかず、新たに「なぜ、日本は自国で機械を生産しているのにも関わらず、外国からも輸入しているのだろう。」という疑問が生じることが想定される。

第二段階では、日本と中国の貿易を基に、「価格に占める人件費の割合」の表と「日中両国の人件費の比較」の図を関連付けて考察し、比較優位、比較劣位の概念を基に国際分業による自由貿易の概念の獲得を目指す。

これらの概念を獲得することで、児童が一つ一つの社会的現象を関連付けて説明することができるようになると思う。

(2) 地域の社会的現象を扱った単元開発

第3、4学年の社会科では、地域の社会的現象を主に扱うが、第5学年では日本全体を対象とした社会的現象を扱う。広島県には魅力的な現象が多く、地域リソースを取り上げることが児童の学習への意欲を喚起し、概念的・説明的知識の獲得に有効であると考え、単元開発を行った。その際に、食品製造のカルビー、ポテト丸を所有するエヴァライン、建設機械製造のコベルコ等に直接取材を行い、教材化した。また、パソコン、タブレット等を用いて、地域リソースを扱

った資料を児童に効果的に提示することを試みた。直接の取材に加え、Google Earth も活用した。

(3) 指導と評価の一体化を促す工夫

指導と評価の一体化を促すために、問いと知識の構造化に取り組んだ。まず単元で児童に身に付けさせたい知識及びそのための問いを明確にした。次頁図4、図5に示すように、本単元で児童に身に付けさせたい知識を、価値判断を意味する知識、概念的・説明的知識、事実に分類し、その関係性を「問いの構造図」と「知識の構造図」に整理し、構造化した。次に、業者テストを確認し、業者テストで問われていない知識について問う、ミドルテスト及びポストテストを作成した。評価問題の開発と同時に、単元開発と学習指導案作成を行った。その際に、各問いが「問いの構造図」のどの問いと対応しているのかを、学習指導案に明示した。最後に「学びのプラン」を作成し、児童に身に付けさせたい資質・能力や評価方法を示した。各時間の授業を児童が振り返る箇所を設け、形成的評価を可視化できるようにした。これらのことにより、指導と評価をより一体化させることを目指した。

VI 検証授業の分析と考察

1 社会的現象の相互の関連を考察する力を身に付けることができたか

(1) プレテスト・ミドルテスト・ポストテスト・フィードバック問題の結果から

前述の「知識の構造図」に基づき、児童が身に付けた知識を分類し、結果を分析した。結果が正答率80%未満の問題を中心に、後日児童に授業でフィードバックし、その後フィードバック問題として再度問うた。なお、児童が社会的現象を相互に関連付け、概念的・説明的知識を獲得することに本研究は力点を置いているが、指導と評価の一体化という観点から、事実に知識や価値判断を意味する知識も分析対象とする。

ア 事実に知識を問う問題群

業者テストに出題されていない六種類の事実に知識について問うた。結果を、10頁表8に示す。分析の結果、学習用語の意味や問題の趣旨を正しく理解していない誤答が多く見られた。これらの事実に知識は、概念的・説明的知識獲得の手段となるので、授業で児童にすぐにフィードバックしたり、ICTを活用して復習したりして定着を図った。⑤については、単元終了後のフィードバックを通して整理したことで、正答率が大きく上がったものとする。

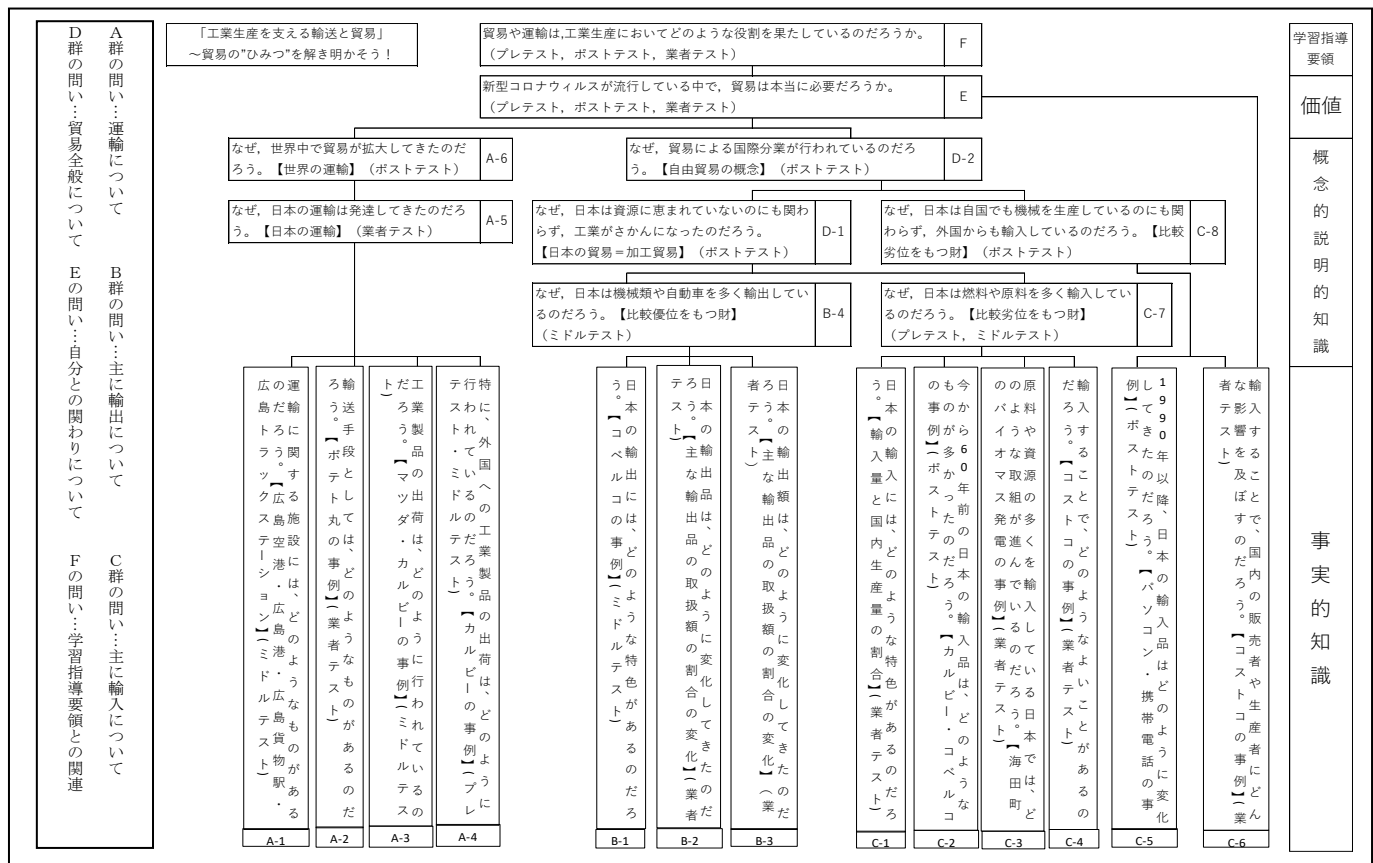


図4 問いの構造図

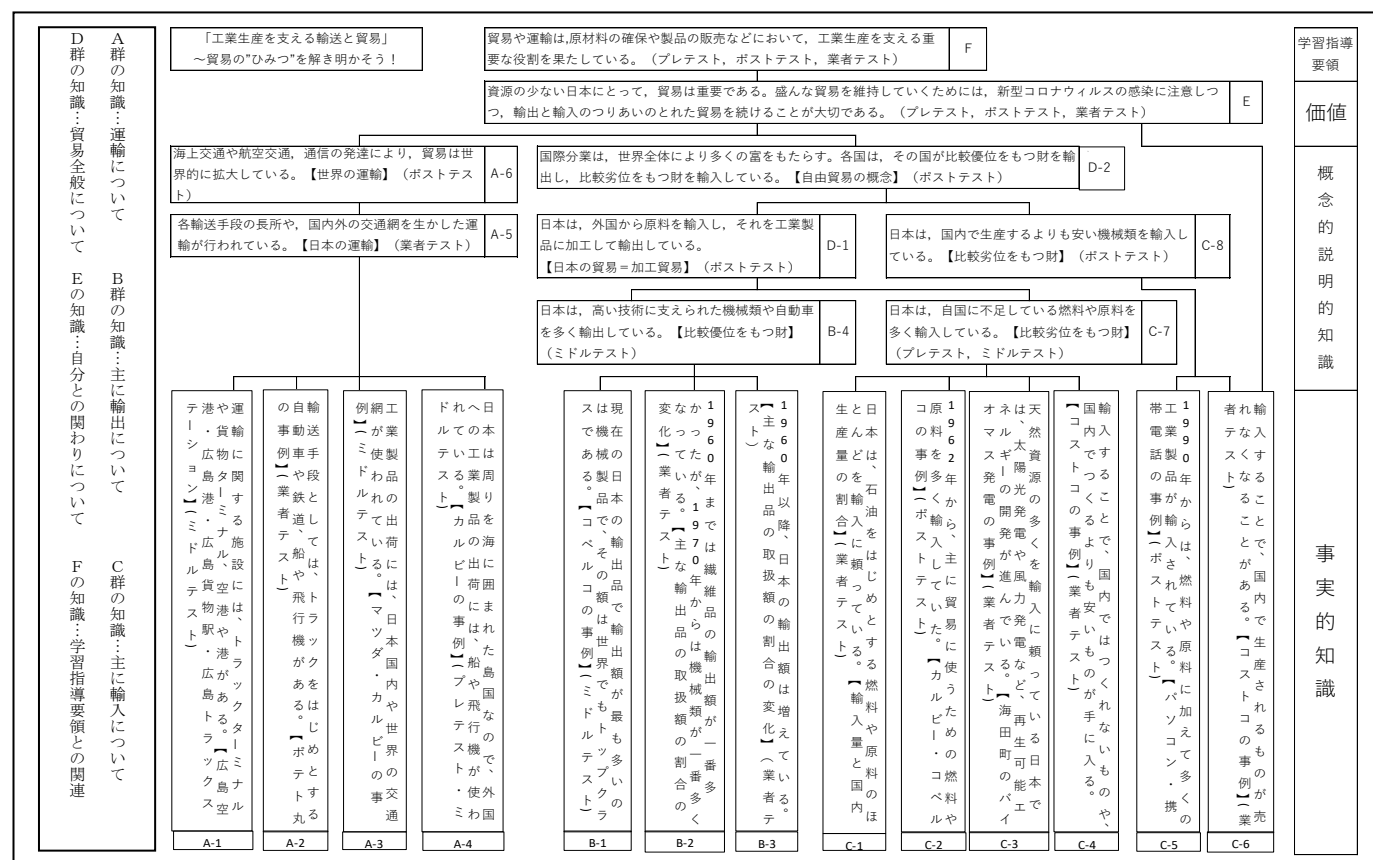


図5 知識の構造図

表 8 事実に基づく知識を問う問題群の正答率(%)

問題の内容の概要 (問の構造図より)	プレ テスト	ミドル テスト	ポスト テスト	フィード バック 問題
①運輸に関する施設には、どのようなものがあるのだろうか。		73.2		
②工業製品の出荷は、どのように行われているのだろうか。		82.1		
③特に、外国への工業製品の出荷は、どのように行われているのだろうか。	69.0	82.1		
④日本の輸出には、どのような特色があるのだろうか。		64.3		
⑤今から 60 年前の日本の輸入品は、どのようなものが多かったのだろうか。			43.6	(発展) 76.4
⑥1990 年以降、日本の輸出品はどのように変化してきたのだろうか。			81.9	

イ 概念的・説明的知識を問う問題群

概念的・説明的知識を問うた結果について、次の表 9 に示す。

表 9 社会的現象の相互の関連を考察する力を問う問題群の正答率(%)

問題の内容の概要 (問の構造図より)	プレ テスト	ミドル テスト	ポスト テスト	フィード バック 問題
①なぜ、世界中で貿易が拡大してきたのだろうか。			74.5	85.5
②なぜ、日本は機械類や自動車を多く輸出しているのだろうか。		85.7		
③なぜ、日本は燃料や原材料を多く輸入しているのだろうか。	17.9	84.0		94.5
④なぜ、日本は自国でも機械を生産しているにも関わらず、外国からも輸入しているのだろうか。			89.1	94.5
⑤なぜ、日本は資源に恵まれていないのにも関わらず、工業がさかんになったのだろうか。		ko	32.7	(基礎) 94.5 (発展) 74.5
⑥なぜ、貿易による国際分業が行われているのだろうか。			80.9	95.5

プレテストに出題した③の問題の正答率は 17.9% で、本校児童の課題を再認識した。そこで、「問の構造図」と「知識の構造図」に基づき、何と何を関連付けるのかを明確にして指導した。その結果、単元途中に実施したミドルテストと単元後に実施したポストテストにおいて、6 問中 4 問が 80%以上の正答率となり、指導の成果を確認できた。一方、80%に届かなかった問題もあり、分析を行った。特に正答率の低かった⑤の問題は、評価問題に大きな課題があったと考えた。評価問題が文章のみの問題で、児童が社会的現象を相互に関連できたのか、見取りにくかった。そこで、評価問題の改善を行った。評価問題は、公益財団法人日本教材文化研究財団の『社会科における

「思考・判断・表現」の評価に関する研究』を参考にし、フィードバック問題として再度作成した⁽⁷⁾。詳細を、別添資料 5 に示す。

令和 2 年 12 月 16 日に、所属校で加工貿易や貿易における運輸の役割について児童にフィードバックした後で、フィードバック問題に取り組ませた。結果を、表 9 に示す。正答率は概ね 80%を超え、フィードバックの成果を確認できた。

ウ 価値判断を意味する知識を問う問題

単元の学習で概念的・説明的知識を身に付けた児童がどのように変容したのかを分析するために、プレテストとポストテストで同じ問題を 2 度出題した。問題は、「新型コロナウイルスが流行している中で、貿易は本当に必要だろうか」とし、学習内容と世の中のニュースを関連付けて判断する内容とした。結果を、次の表 10 に示す。小数点第二位以下は四捨五入して示す。プレテストでは 65.5%の児童が貿易は必要と回答していたが、ポストテストではそれが 78.2%となった。

表 10 貿易に関する児童の意見の割合(%)

	プレテスト	ポストテスト
貿易は必要	65.5	78.2
貿易は不要	29.1	20.0
無回答	5.5	1.8

貿易についての児童の考えの変容と児童の意見の一部を、次頁表 11 に示す。小数点第二位以下は四捨五入して示す。当初、新型コロナウイルスの感染拡大の影響から貿易は不要と考えていたが、学習を通して貿易は必要であると意見が変わった児童が、全体の 14.5%見られた。D 児は、新型コロナウイルスの感染というリスクを踏まえつつも、日本の工業にとって貿易が必要不可欠であるというような内容について記述している。

エ 学習指導要領を基に作成した、単元の目標としての知識及び技能を問う問題

小学校学習指導要領(平成 29 年告示)第 2 節社会第 2 各学年の目標及び内容[第 5 学年]2 内容(3)ア(ウ)に、「貿易や運輸は、原材料の確保や製品の販売などにおいて、工業生産を支える重要な役割を果たしていること」⁽¹³⁾とある。このことを問うた結果を、次頁表 12 に示す。また、学習の前後の変容を見取るために、プレテストとポストテストで同じ問題を 2 度出題した。単元の学習を通して、正答率が 50.9%から 83.8%に上がった。「問の構造図」と「知識の構造図」を用いた指導を行い、知識の構造化を行

表 11 貿易に関する児童の意見の変容(%)

	プレテスト	ポストテスト	割合
① A 児	貿易は必要 コロナだからとためらうと、国で手に入るものが減ってしまうから。	貿易は必要 もし、貿易が止まってしまったら、日本では、国民が、必要なものを手に入られず、困ってしまうから。	61.8
② B 児	貿易は不要 中国（外国）でコロナが、はやっているから。	貿易は不要 コロナが流行している時、貿易をしてしまうと、コロナにかかってしまうから。	14.5
③ C 児	貿易は必要 貿易されないと、いろいろの人が困るから。	貿易は不要 コロナウイルスにかかったら、ウイルスを運んでしまうから。	3.6
④ D 児	貿易は不要 今、どこでもコロナウイルスが流行っている。しかも外国の方はコロナが多いから。	貿易は必要 コロナウイルスに感染するかもしれないけど、工業がうまくいかなくなるから。	14.5
⑤ E 児	無回答 —	貿易は必要 コロナでも、足りていないものを輸入したり、輸出しないと困るから。	1.8
⑥ F 児	無回答 —	貿易は不要 5000 万人の人が死んでいるんだから。	1.8
⑦ G 児	無回答 —	無回答 —	1.8

った結果、多くの児童が単元の目標としての知識及び技能を獲得したものとする。

表 12 学習指導要領を基に作成した、単元の目標としての知識及び技能を問う問題の正答率(%)

問題の内容の概要（問いの構造図より）	プレテスト	ポストテスト
貿易や運輸は、工業生産においてどのような役割を果たしているのだろうか。	50.9	83.8

(2) 事後アンケートの結果から

次の表 13 に示すように、五つの項目について事後アンケートを行った。①より、本単元の学習を通して、社会的事象の相互の関連を考察する力が身に付いたと、多くの児童が感じていることが分かった。このことは、評価問題の結果と併せて、本研究の大きな成果であるとする。②、③より、地域の社会的事象を扱った単元開発が児童に有効であったことを、一定程度確認できた。また、④、⑤より、ICTを活用した授業が児童に有効であったことを、一定程度確認できた。

(3) テキストマイニング分析の結果から

ア テキストマイニング分析とは

学習集団としての児童が、単元の学習前後でどのように変容したのかを捉えるために、テキストマイニング分析を試みた。テキストマイニングとは、自由記述のような文書形式のデータを定量的な方法で分析することをいう。KH Coder という、フリーのソフトウェアを用いる。本研究では、テキストマイニン

表 13 事後アンケートの結果(%)

アンケート項目	よく当てはまる または 当てはまる	あまり 当てはまらない または 当てはまらない
①あなたは、「工業生産を支える輸送と貿易」の学習を通して、比べたり関連付けたりして考える力が身に付いたと思いますか。	94.5	5.5
②運輸や貿易の学習で広島県の会社を扱ったことで、興味をもって学習に取り組めた。	90.7	9.3
③運輸や貿易の学習で広島県の会社を扱ったことで、運輸や貿易のことがよく分かった。	98.1	1.9
④運輸や貿易の学習でパソコンやタブレットを扱ったことで、興味をもって学習に取り組めた。	90.7	9.3
⑤運輸や貿易の学習で、パソコンやタブレットを扱ったことで、運輸や貿易のことがよく分かった。	88.9	11.1

グ分析の手法の一つである、共起ネットワークを用いた。これは、抽出した言葉の関連性（共起性）を分析したものである。抽出された言葉の頻度は円の大きさで、また関連性は線のつながりとして、視覚的に確認できる⁽⁸⁾。5年生児童 56 人の回答内容を、一つのグラフの中に要約して示す。グラフには、児童の文章の中に 4 回以上出現した言葉の中から、他の言葉と関連するものを示している。以下、分析結果について述べていく。

イ 概念的説明的知識を問う問題への児童の解答の分析結果

前述の、「なぜ、日本は燃料や原材料を多く輸入しているのだろう。」という、概念的説明的知識を問う問題への児童の解答の分析結果を、次頁図 6 に示す。また、図 6 を拡大したものを別添資料 2 に示す。

上が単元の学習前のプレテスト、下が単元の学習後のフィードバック問題の結果である。プレテストでは、貿易に関する言葉がほとんど見られず、わずかに「輸出」、「輸入」が見られるだけであった。貿易の概念が児童にまだ形成されていないこともあり、「分ける」、「分け合う」といった言葉が多く見られた。一方、フィードバック問題では「貿易」、「輸出」、「輸入」といった言葉が多く見られるようになった。これらの言葉を起点として、多くの言葉が関連付けられていることが分かる。また、「得意」という比較優位の理論につながる言葉が現れ、「得意」－「国」－「貿易」と関連付けられている。これらのことから、学習を通して多くの児童が貿易に関する概念を獲得し、社会的事象を相互に関連付けていったことが分かった。

主な語句の出現回数の変容を、次頁表 14 に示す。なお、「ベアー王国」、「フィールド共和国」等、評価問題中に出現していて解答に必要な不可欠な言葉は除いている。プレテストからフィードバック問題にか

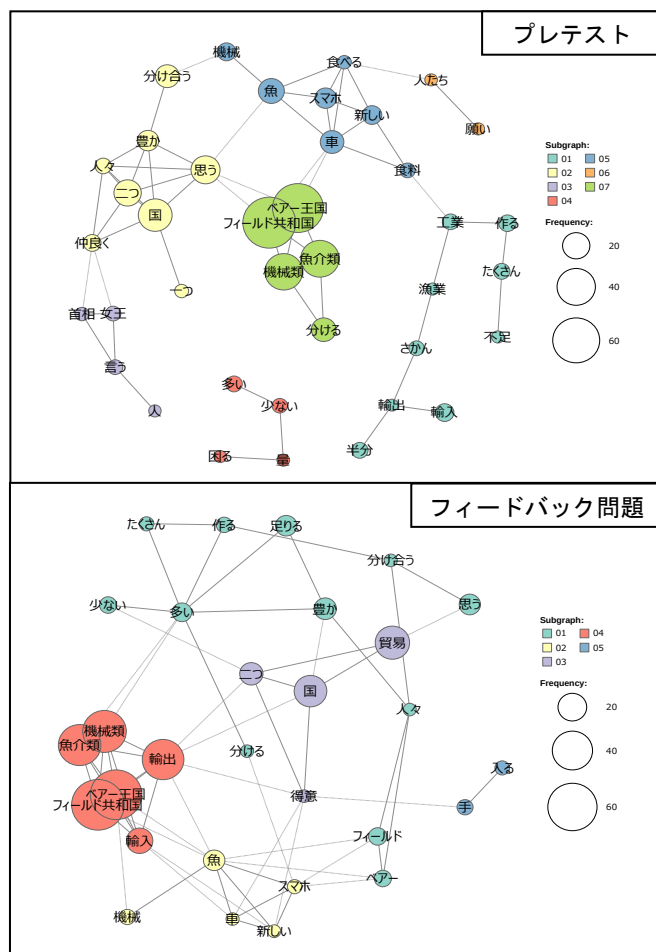


図6 概念的説明的知識を問う問題への児童の解答の分析結果

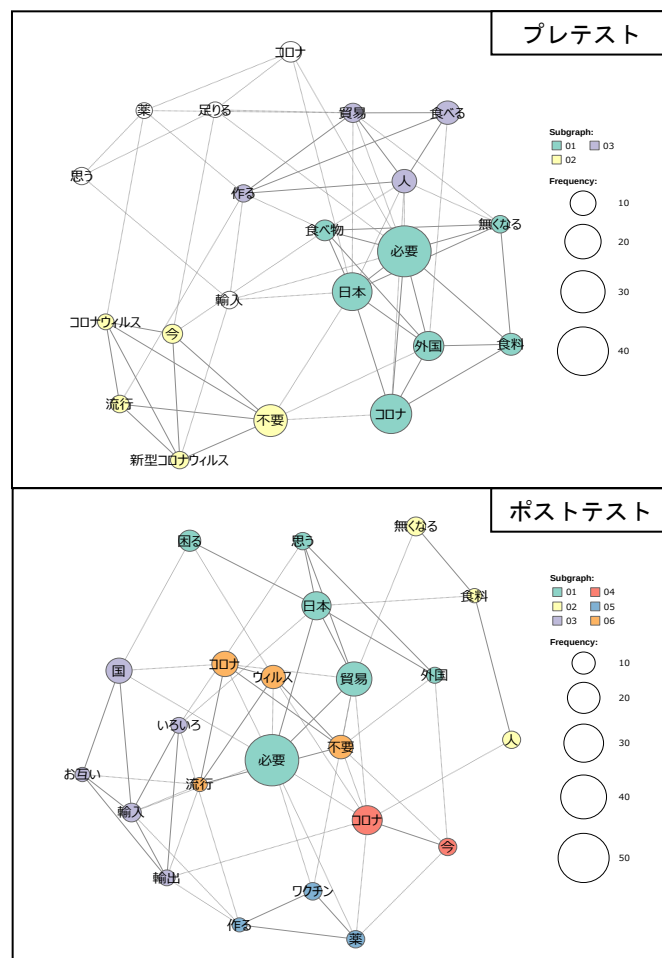


図7 価値判断を意味する知識を問う問題への児童の解答の分析結果

表 14 主な語句の出現回数の変容(回)

プレテスト		ポストテスト	
分ける	16	輸出	43
分け合う	15	貿易	29
輸入	9	輸入	17
輸出	4	得意	4
貿易	2	分ける	4
得意	0	分け合う	4

けて、「輸入」、「輸出」、「貿易」という言葉の出現回数が大きく増加していることが、この表からも分かった。

ウ 価値判断を意味する知識を問う問題への児童の解答の分析結果

前述の、「新型コロナウイルスが流行している中で、貿易は本当に必要だろうか。」という、価値判断を意味する知識を問う問題への児童の解答の分析の結果を、次の図7に示す。また、図7を拡大したものを別添資料2に示す。

上が単元の学習前のプレテスト、下が単元の学習後のポストテストの結果である。プレテストでは、貿

易を「必要」とする意見が「不要」とする意見よりも多く見られた。「必要」は、「食料」や「食べ物」と関連付けられていた。また、「人」を介して「食べる」と関連付けられていた。このことから、多くの児童が既習の食料自給率の問題と貿易を関連付けて考えていたことが分かった。一方、貿易が不要と考えた児童は、「新型コロナウイルス」、「コロナウイルス」、「流行」と関連付けて考えていたことが分かった。ポストテストでは、貿易の「必要」と「不要」の差が更に開いたことが分かった。ポストテストでは、「困る」が多く見られるようになり、「必要」－「貿易」－「日本」－「困る」と関連付けられている。また、「困る」－「国」－「輸入」－「輸出」も関連付けられている。これらのことから、児童が学習を通して貿易の必要性を感じるようになってきたことが分かった。一方、貿易が不要と考えた児童は、「ウイルス」－「コロナ」－「流行」と関連付けて考えていて、プレテストと比べ質的な変容が見られなかった。その他、「必要」－「ワクチン」－「薬」－「作る」と関連付けているこ

とから、単元の学習と世の中のニュースを関連付けて考えている児童がいることが分かった。主な語句の出現回数の変容を、次頁表 15 に示す。プレテストからポストテストにかけて、「貿易」、「輸入」といった言葉の出現回数が増加した。また、「困る」、「輸出」といった言葉が新たに見られるようになった。

表 15 主な語句の出現回数の変容(回)

プレテスト		ポストテスト	
必要	44	必要	55
コロナ	33	コロナ	30
不要	17	貿易	24
食べる	9	ウィルス	11
食料	8	不要	11
食べ物	7	困る	9
貿易	6	輸入	7
新型コロナウィルス	5	ワクチン	6
輸入	5	薬	6
流行	5	輸出	5
コロナウィルス	4	食料	4
薬	4	流行	4

2 「学びのプラン」で児童は学習の見通しをもつことができたか

「学びのプラン」の詳細を、別添資料 3 に示す。「学びのプラン」は、児童に配付するだけではなく拡大して教室にも掲示し、毎時間、教師と児童が学習の見通し等について共有した。

事後アンケートの結果を、次の表 16 に示す。肯定的な回答の児童が 6 人増えて 55 人中 51 人になり、第 1 時後の結果と単元終了後の結果との間に、有意な差が見られた。

表 16 事後アンケートの結果（t 検定）

項目	「学びのプラン」を使うことで、学習に見通しをもつことができましたか。						t 検定(片側)
	肯定			否定			
回答	できた	まあできた	小計(人)	小計(人)	あまりできなかった	できなかった	
第1時後	21	24	45	10	6	4	p<0.05
単元終了後	23	28	51	4	3	1	

* 有意な差が見られた。

単元終了後には、92.7%の児童が学びのプランを使うことで学習の見通しをもつことができたと回答しているが、アンケートの児童の記述に着目してみた。それを、次の表 17 に示す。

A～E 児は、第 1 時の授業終了時から学びのプランの有用性を感じていた児童である。B、C 児のように、予習やテストに向けた学習に活用した児童が数名見られた。F～H 児は、当初は学びのプランの有用性を感じていなかったが、単元の終了後には有用性を感じていた児童である。児童により感じ方の差はあるが、学びのプランを学習に生かしていたことが分かった。特に、H 児にとって「学びのプラン」が有効であることが分かった。多くの児童が見通し

をもつことができたが、身に付けたい資質・能力や評価方法についての児童の記述はほぼ見られなかった。学びのプランを使って学習効果を高めていくためには、学習評価の計画もより一層共有することが有効であるとする。

表 17 事後アンケートの記述

児童	記述内容
A 児	毎日それを読んで、見直しをもてた。
B 児	次やることがもう書いてあるから予習ができた。
C 児	次に何をするかを調べて、家で調べてきた。
D 児	次何をするのか見て分かったし、おもしろそうだなと思うようなプランが書いてあって分かりやすかった。
E 児	次の学習を見て、例えば輸出や輸入相手国をどこか考えた。
F 児	学習を見通すことはちょっとできた。
G 児	学びのプランがあると何をするかとかがよくわかって勉強しやすかった。
H 児	学びのプランで自分でもいい振り返りができたと思った。

3 教師の指導改善につなげる工夫

前述の峯（2011）の「知識の構造化・推論過程の組織による P D C A サイクル」を活用し、教師の指導改善を試みた。それを、次の表 18 に示す。

表 18 峯の P D C A サイクルに基づいた、実践の振り返り

	計画（P）	実践（D）	評価（C）	改善（A）
授業観	学習指導要領や専門書を基に、児童に獲得させたい概念を決定した。	専門書等を基に教材研究を深めた。	児童の概念形成の過程を見直した。	問いと知識の構造図を一部修正した。
授業の組織	問いと知識の構造図及び学習指導案を作成した。	構造図と学習指導案に基づき、発問、指示を行った。	構造図を基に、問いと資料の構造を見直した。	学習指導案を一部修正した。
授業の具体	問いの構造図と学習指導案中の問いの整合性を確認、修正し、評価問題を作成した。	発問し、資料を基に考え、説明させた。	評価問題を実施した。その後、評価問題を再度作成し、フィードバックの後、取り組ませた。	授業実践と評価問題を見直した。

授業観、授業の組織については、知識の構造化は概ねできていたと考えるが、不十分な部分もあり、概念的説明的知識の獲得が困難な場面があった。そこで、知識の構造図を見直し、一般化、抽象化の高い概念的説明的知識から個別化、具体化を図るように改善を試みた。授業の具体については、児童の意欲を喚起する資料提示ができたが、資料の精選が必要な場面があった。そこで、児童が複数の資料を関連付け、段階を追って推論できるよう問いと資料を見直した。

この P D C A サイクルを活用することで、振り返りの視点がより明確になり、指導と評価の一体化に効果を発揮したと考える。

Ⅶ 研究のまとめ

1 研究の成果

本研究の成果について大きく二点述べたい。

一点目は、地域リソースを活用し、児童に分かりやすい具体事例を示し、児童に社会的事象の相互の関連を考察する力を育成することに有効な単元開発及び検証を行うことができたことである。

二点目は、学習評価について文献研究や調査研究を通して、これまでの学習評価の在り方を振り返り、業者テストだけでは見取ることができない児童の学習状況を把握し、具体的なフィードバックに生かす工夫を行ったことにより、児童への学習指導の効果を確認できたことである。特に、児童への効果的なフィードバックを可能とした工夫は次の五つである。

一つに、「問いの構造図」と「知識の構造図」を作成し、児童に身に付けさせる知識の構造化を図ったことである。更に、これらの構造図と評価問題も対応させ、評価についても明確にした。これらのことにより、教師が何と何を関連付けて指導するのが明確になった。二つに、ICTを効果的に用いて児童に提示したことで、児童の学習意欲を高めることができたことである。これにより、児童が何と何を関連付けて考えるのが明確になった。三つに、「学びのプラン」を用いることで、児童が学習の見通しをもつことができ、教師も形成的評価に生かすことができたことである。四つに、テキストマイニング分析の共起ネットワークを活用したことで、文章記述を基に児童が社会的事象をどのように関連付けているのか、学年全体の傾向を見取ることができたことである。五つに、峯のPDCAサイクルを用いることで、教師の振り返りの質が高まったことである。

2 本研究のリサーチアンサー

①小学校社会科において、児童に社会的事象の相互の関連を考察する力を育成する学習指導は、学習過程で児童と教師が追究する「問い」や「知識」を構造化する過程で学習評価との関連を明確にすることや、児童に分かりやすい教材を示すことで、どの社会的事象を関連付けるのが明確になり、有効である。②また、身に付けた力を見取る学習評価は、授業やテスト評価で既習事項との関連や自己との関連を考察し説明する場面を用意し、多様な評価方法を工夫することが、児童へのフィードバックにつながり、有効である。

3 研究の課題と今後の展望

課題について二点述べたい。一点目は、授業と評価問題との関連を一層重視し、学習指導を充実させて

いくことである。二点目は、「学びのプラン」の活用についてである。児童が見通しをもつだけでなく、そのことにより主体的に学び、自らの学びを深める有効なツールにしていきたい。

今後の展望について二点述べたい。一点目は、社会的事象の相互の関連を考察する力を育成するために本研究の成果を、他学年や他単元での指導に生かすことである。二点目は、本研究の成果を他教科にも広げ、児童に関連付ける力を育成したり、共起ネットワークを活用し、その有効性を検証したりしていくことである。今後も継続して取り組んでいきたい。

【注】

- (1) 原田智仁編著(2020):『社会科教育のルネサンスー実践知を求めてー』教育情報出版 pp. 34-49 に詳しい。
- (2) 森分孝治(1984):『現代社会科授業理論』明治図書 pp. 122-127 に詳しい。
- (3) 原田智仁編著(2020):前掲書 p. 13 に詳しい。
- (4) 迫有香(2017):「グローバル社会の見方・考え方の育成」『教育科学 社会科教育 12月号』明治図書 pp. 108-111 を参照した。
- (5) 国立教育政策研究所(令和2年):『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』p. 35 に詳しい。
- (6) 峯明秀(2011):『社会科授業改善の方法論改革研究』風間書房 p. 109 に詳しい。
- (7) 公益財団法人日本教材文化研究財団(平成26年):『社会科における「思考・判断・表現」の評価に関する研究』pp. 8-10 に詳しい。
- (8) 牛澤賢二(2018):『やってみようテキストマイニングー自由回答アンケートの分析に挑戦！ー』朝倉書店 pp. 1-6 に詳しい。

【引用文献】

- 1) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(答申)(平成28年) p. 132
- 2) 文部科学省(平成30年):『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説社会編』日本文教出版 p. 17
- 3) 文部科学省(平成29年告示):『小学校学習指導要領』p. 23
- 4) 文部科学省(平成30年):前掲書 p. 23
- 5) 文部科学省(平成30年):前掲書 p. 22
- 6) 文部科学省(平成30年):前掲書 p. 22
- 7) 原田智仁編著(2020):『社会科教育のルネサンスー実践知を求めてー』教育情報出版 p. 43
- 8) 森分孝治(1997):「社会科における思考力育成の基本原則ー形式主義・活動主義的偏向の克服のためにー」全国社会科教育学会『社会科研究』第47号 p. 1
- 9) 森分孝治(1997):前掲書 pp. 9-10
- 10) 峯明秀(2014):「社会科の学力評価論の批判的検討ー学習の事実に基づく授業改善研究の必要性ー」全国社会科教育学会『社会科研究』第80号 2014 p. 33
- 11) 高木展郎(2019):『評価が変わる、授業を変える』三省堂 p. 70
- 12) 高木展郎(2019):前掲書 p. 177
- 13) 文部科学省(平成29年告示):前掲書 p. 54